

The Japanese Association for Metastasis Research

NEWSLETTER Vol. 51

- 第27回 学術集会のご案内
第28回 学術集会のご案内
寄稿 竹之下 誠一 功労会員
西村 行生 功労会員
海野 倫明 新理事
(東北大学大学院 消化器外科学)
竹田 和由 新理事
(順天堂大学 研究基盤センター)
- 評議員の申請案内
第23回 研究奨励賞募集案内
会則/役員選任規程/役員名簿/変更届



日本がん転移学会

URL : <http://jamr.umin.ac.jp>

第27回日本がん転移学会学術集会/総会の案内

会 期 : 平成30年(2018年) 7月19日(木) ~20日(金)

会 場 : ホテルメルパルク横浜 (最寄り駅: みなとみらい線、元町・中華街駅側)

テーマ : “がん転移制圧にむけた異分野融合による技術革新”

おもなプログラム

* 特別講演 : Professor Danny R. Welch (University of Kansas Medical Center)
(SBIファーマ株式会社共催)

* シンポジウム

- 1 ドラッグデリバリーシステムによるがんの革新的診断・治療戦略
世話人: 谷口博昭(東大医科研)、片岡一則(ナノ医療イノベーションセンター)
- 2 がん転移研究が切り開く新しい診断法と治療
世話人: 西岡安彦(徳島大学)、矢野聖二(金沢大学)
- 3 数理・データサイエンスを用いた腫瘍学研究
(新学術領域研究 細胞ダイバース 共催)
世話人: 鈴木 貴(大阪大学)、谷口俊一郎(信州大学)
- 4 がん悪性化機構の解明につながる新たな解析技術とモデルシステム
世話人: 三森功士(九州大学)、藤田直也(がん研究会)

◆会議予定◆

| | | | |
|-------|----------|-------------|---------|
| 理 事 会 | 7月18日(水) | 17:00~18:00 | メルパルク横浜 |
| 評議員会 | 7月19日(木) | 12:30~13:30 | メルパルク横浜 |
| 総 会 | 7月19日(木) | 13:35~13:55 | メルパルク横浜 |

●全員懇親会● 7月19日(木) 19:00~ 中華菜館「同發 別館」

【第27回学術集会/総会事務局】

会長 越川 直彦(神奈川県立がんセンター臨床研究所 がん生物学部)

〒241-8515 横浜市旭区中尾2-3-2

E-mail: koshikawalab@icloud.com

運営事務局: 株式会社ライフメディコム

〒111-0054 東京都台東区鳥越2-13-8 TEL:03-5809-1933

ホームページ <http://www.waaint.co.jp/jamr2018/>

E-mail: jamr2018@lifemedicom.com

第28回日本がん転移学会学術集会・総会の案内

会 長 : 夏越 祥次(鹿児島大学大学院 腫瘍学講座 消化器・乳腺甲状腺外科学)

会 期 : 平成31年(2019年) 7月25日(木) ~26日(金)

会 場 : 城山観光ホテル(鹿児島市)

テーマ : 見える転移, 見えない転移との闘い

寄稿 1 : 「外科臨床とがん研究」

竹之下 誠一 功労会員 (福島県立医科大学理事長兼学長)

このたびは、日本がん転移学会の功労会員に推戴していただきありがとうございました。私は、外科の臨床医として、様々な癌研究のなかで得られた成果を、いかに実践に応用していくかを考えてきました。時代は急激に進歩し、基礎研究の成果が短期間のうちに臨床の現場で活用されることが可能となり、積み上げてきたデータが生きてきます。功労会員という立場をいただきましたのは、いい機会です。時代背景とともに研究歴をふり返り、当初は予想もし得なかった研究システムから走り出した医産連携「福島モデル」構築までの道のりをご紹介します。

ポリアミンの時代

1970年代、私が研究を始めたころは、生化学的手法で癌関連物質を検出し、いかに早期に癌を見いだせる手段を見つけるかということが主流でした。そこで癌に特異的に発現している物質や発現が増減する代謝産物を組織や血液、尿、糞便から検出することに着目しました。当時の最先端を走る群馬大学内分泌研究所生理部門の松崎茂先生の門をたたき、ほどなく大腸癌の癌組織と腺腫、正常組織のN1-アセチルスペルミジンの測定に成功し、癌組織で腺腫や正常粘膜に比べて有意に発現量が高いことを報告しました(Cancer Res, 1984)。

時は前後しますが、臨床面での専門家を目指して、当時の世界のメッカといわれた社会保険中央総合病院大腸肛門病センターに、2年間国内留学致しました。隅越幸男センター長のご指導のもと、直腸癌や肛門疾患の手術や臨床研究の真髄を学びました。社保では手術だけでなく、当時の先端医療であった、大腸内視鏡の技術を習得しました。私の学位論文は、N1-アセチルスペルミジンが、癌組織で腺腫や正常粘膜に比べて有意に発現量が高いという報告でしたが、手術材料だけでなく、内視鏡からも臨床検体取得可能なことで、検体数が飛躍的に増え、これ以後の研究を展開していく素地となりました。癌や腺腫などの臨床材料を自分で集められることが、他の基礎の研究者との大がかりな共同研究にも発展しました。

この当時から論文には、遺伝子(gene)レベルの結果が必須となりました。当然、次のステップは分子生物学的手法の体得です。国立がんセンター生物学部・部長横田淳先生のご紹介で、p53の研究で世界の最先端を走っていたCurtis C. Harris博士の主宰する米国国立がん研究所(LHC/NCI/NIH)に、1995年の文科省の長期在外研究員として 留学させていただきました。

TGF β の時代

ボスのCurtからいただいたテーマは、「TGF- β super familyと癌との関連」という壮大なものでした。今では癌化のメカニズムの主軸の一つであるTGF- β 経路の中のTGFRIIやSmadファミリーの各種癌組織の遺伝子変異を発表し(Genomics, Carcinogenesis, Oncogene, Cancer Res, Clin Cancer Res, etc)、この成果は現在でも多くの研究者に引用されています。Curtのご許可のもと、7台のPCRや1台のシーケンサー等の当時のハイテクマシーンをほぼ独占的に利用させていただき、昼夜を問わずに、時代の先端に行く研究に没頭できたことが、癌治療システム構築のモチベーションとなっています。

福島県立医大

1999年に福島医大第二外科(現器官制御外科)に赴任致しました。教室の方針は、これまで同様、臨床に携わる外科医の持つアドバンテージ(臨床検体や臨床情報など)を最大限に活用し、臨床に直結する様々なことに取り組むことにしました。特に2007年から2011年まで行われた経済産業省/NEDOプロジェクト「基礎から臨床への橋渡し促進技術開発/遺伝子発現解析を活用した個別がん医療の実現と抗がん剤開発の加速」(以下TRプロジェクト)では、独自開発した遺伝子発現解析技術を活用し、様々ながんの網羅的遺伝子発現解析及びそれらに付随する臨床情報を体系的に取得・解析してきました。その後、TRプロジェクトは、福島第一原発事故後

の震災復興事業の一つである経済産業省の「福島医薬品関連産業支援拠点化事業」として、平成24年度から継続的に発展することになりました。具体的には、新規生体材料として、手術・生検サンプルからの細胞・組織培養系及び免疫不全動物への移植系の構築、並びに各種遺伝子（転写因子やがん遺伝子（変異体を含む）等）を導入した細胞の創出と、それらの評価（DNA・RNA・タンパクレベル）を行っています。さらに遺伝子発現解析システムのイノベーションの結果、生検サンプルやパラフィン包埋病理組織切片からの網羅的遺伝子発現解析を可能にしました。パラフィン包埋病理切片を用いた過去の症例の解析（後ろ向き研究）により抗がん剤の効果の有無と相関して発現レベルが異なる遺伝子群を探索し、生検サンプルを用いて検証（前向き研究）できる可能性も見出しています。今後、これらの解析データを活用することにより、様々な検査・診断用バイオマーカー開発に貢献できる可能性があります。この拠点は、医療機関／産業界ネットワークのハブとして機能すべく、あらゆる疾患を中心とした臨床検体と臨床情報の収集・管理・加工・解析を基盤的活動として長期継続できるポテンシャルを有しており、医産連携「福島モデル」として継続発展しております。

終わりに

福島での大震災・原発事故と、現在進行中の復興事業は、歴史的使命です。今後とも学会員の皆様のご協力をお願いするとともに、本学会のご発展を祈念致しております。

寄稿 2：「日本がん転移学会へ感謝して」

西村 行生 功労会員（元 九州大学大学院薬学研究院）

このたび平成29年7月に大阪市で開催されました第26回日本がん転移学会学術集会・総会におきまして学会功労会員に推挙されました。このような機会を得たことは光栄の至りと思っており、ご推薦いただきました学会理事会、評議員会の役員の方々、そして大会会長の土岐祐一郎先生に厚くお礼申し上げます。

私は平成29年3月に九州大学薬学部を定年退職しましたが、昭和45年4月に九州大学薬学部に入學した後、薬学部4年時の昭和48年夏頃には生理化学教室（加藤敬太郎教授）に配属され、その後大学院修士、博士課程に進学しました。加藤研では細胞生物学・生化学の基礎領域における「リソソームの形成機構」解明を主な研究目的としておりましたが、博士取得後は海外留学のために1981年8月から米国Sabatini教授の研究室（New York University医学部）でポストドクとして研究することになりました。1984年夏に帰国後は再び九大薬学部の加藤研に助手として採用され、リソソームプロテアーゼである複数のカテプシン分子の生合成、プロセッシング、細胞内輸送機構に関する研究に従事する一方、新たな研究テーマとして“カテプシンと癌浸潤転移”の研究に取り組むことにしました。そこで当時（1990年頃）九大生医研に在籍しておられた谷口俊一郎先生（元信州大学教授）から2種類の癌源遺伝子（v-fos, v-src）で形質転換した転移性癌細胞を供与して頂きリソソームの細胞内動態を生化学的に検討した結果、多量の前駆体カテプシンLが細胞外に分泌される異常な現象を見出しました。この事実から転移性癌細胞ではリソソームへの物質輸送制御が攪乱される結果、前駆体分子が細胞外に分泌されるという結論を得ました。

1992年には同研究室の姫野勝先生（元九大教授、現長崎国際大教授）のご推薦により助教授に採用されましたが、さらに本研究を進めるために癌原遺伝子c-Ha-rasの活性型変異体を導入した転移性乳癌細胞（米国Sloane教授（Wayne State University）からの供与）についてリソソームの挙動を共焦点レーザー顕微鏡で解析した結果、活性型ras遺伝子導入した細胞ではmicrotubule構成タンパク質の制御系に変化が起きる現象を観察し、同時にリソソームの形質膜

方向への移動に繋がるという推論に至りました。この実験結果を1998年大阪で開催されました第51回日本細胞生物学会で発表しましたが、発表会場で偶然お会いした伊藤和幸先生（現野崎徳洲会病院）と議論し、先生からはRhoA-ROCKシグナル系の関与についても検討するべきというご意見を賜りその後の伊藤先生との共同研究に繋がりました。引き続いて活性型RhoA/ROCK/LIMK1をそれぞれ安定発現する高転移性乳癌細胞についてリソソーム/エンドソーム動態を解析した結果、予想したように細胞骨格系の形態変化とリソソーム/エンドソームの動態異常が同時に観察された一方、新たに細胞膜上のEGFRのendocytosisとその分解機構が抑制される現象を初めて証明しました(1998-2008年)。これらRhoファミリーの発現異常とリソソーム/エンドソーム制御系の変化を引き起こす分子機構については今後解析を進めるつもりです。また最近まで非小細胞肺癌の分子標的薬gefitinibの耐性機構についての研究を進めておりますが、耐性細胞内では感受性細胞の場合とは異なりEGFR endocytosisが抑制され、活性型EGFRが初期エンドソーム内に多量蓄積し、リソソームによるEGFR分解も抑制される現象を新たに見出しておりますので、gefitinib耐性には従来証明されているEGFR遺伝子異常に加えてendocytosis制御系の変化が関わることを予想しております。

日本がん転移学会へは伊藤先生のご推薦により2001年に入会し、第11回大会（東京）で初めて成果発表させて頂きましたが、それ以降は全国各地で開催される本大会で成果発表することが楽しみとなり日々実験したことが懐かしく思い出されます。伊藤先生とは私の研究の転機とも言える時期に偶然出会いその後の私の研究を進めてゆく上で大きな励みになりました。

これまでの私の研究は多くの共同研究者達の協力無しには成し得ませんでした。そして日本がん転移学会の会員となり、本学会発表の場において他研究機関に所属する多くの優れた共同研究者たちとの出会いに恵まれたこと、またがん転移研究の専門家達との意見交換の場を持たせたことに感謝しております。

寄稿3：肝転移の外科手術と研究に魅せられて

海野 倫明 新理事（東北大学大学院 消化器外科学）

この度、歴史ある日本がん転移学会の理事の末席に加えていただき、大変光栄に存じております。自己紹介を兼ねて、私のこれまでの”がん転移”との関わりを述べたいと思います。

私は1986年に東北大学医学部を卒業し、2年間の初期研修を終えた後、その当時、松野正紀先生が主宰する東北大学第一外科に入局いたしました。肝胆膵外科を志したのですが、多くのがん患者さんが手術をしても再発していくのを見て、何か新しいことをしなければがんは治せない、と思い、その当時、分子生物学を東北大学に初めて持ち込んだ岡本宏先生（東北大学第一医化学）の門を叩くことにし、大学院に入学しました。大変厳しい指導で有名な岡本宏教授の元で、ラットの膵切除術、ランゲルハンス島分離・培養、遺伝子クローニング、トランスジェニックマウス作成、ノックアウトマウスの作成、など大学院4年間と日本学術振興会の2年間、計6年間をどっぷりと基礎研究に打ち込みました。

その後臨床に戻り、肝胆膵外科の臨床を行うことになりましたが、その当時、膵癌や胆道癌、肝細胞癌の手術は教授・助教授・講師が執刀し、若手には肝転移の症例くらいしか回ってこない時代でした。大腸癌肝転移は、比較的簡単で若手にも出来る、いわば敗戦処理のような手術、というのがその当時の一般認識でしたが、いざ取り組んでみると、とても面白い疾患であることに気がきました。まず、背景肝が多くの場合、正常ですので、大量肝切除術も比較的安全に行うことができ、術者のプランニング通りの治療ができることに外科医としてのやりがいを感じました。また、抗癌剤がほぼ無い時代でしたが、多発肝転移であっても肝動注カテーテルを留置し5-FUを動注すると、劇的に効く症例があり、このような症例に切除を行うことで長期生

存例があることも経験いたしました。このような経験から、どのような機序で抗癌剤が効く・効かない、外科切除で長期生存が得られる・得られない、が決定されるのかに興味を持つようになりました。その当時、胆汁酸・薬物トランスポーターの研究をしておりましたが、このような薬物トランスポーターのプロファイルががん細胞の性質、すなわち抗がん剤の感受性・耐性機構や、転移再発への関与に興味を持ち、日本がん転移学会に入会いたしました。

最近膵がんの術前治療（ネオアジュバント治療）に積極的に取り組んでいます。手術の前にがん化学療法をする、という治療法は一昔前には考えられない戦略でしたが、今は皆が競って術前治療に取り組んでおり、最悪のがんと言われた膵がんに一筋の光が差し込むようになりました。膵がんの治療成績向上のキーポイントも肝転移とリンパ節転移のコントロールです。進行した膵がんに対しては、最初にごん化学療法を行い、微小転移をコントロールした後に、手術のメリットがある患者を適切な手法で選択し、その患者に対して過不足がない手術を行い、合併症を起こさず速やかに術後補助化学療法を行うことが、膵がんの治療成績向上に直結する戦略であると考えております。そのためにも、ゲノム医療の推進と、その先のエピ・ゲノムの理解が重要と考えております。がん転移研究を通して、膵がんや胆道がんなどの消化器がんの治療成績向上に全力で取り組みたいと考えております。

今後も、日本がん転移学会の会員の皆様のご指導とご鞭撻をいただきたく、どうぞよろしくお願いたします。

寄稿 4 : がん転移研究と抗腫瘍免疫研究

竹田 和由 新理事（順天堂大学大学院医学研究科 細胞機能研究室）

この度、本学会の理事を務めさせて頂くこととなりました。思えば、日本がん転移学会の前進である“がん転移研究会”の発足当初に、若輩者にもかかわらずがん転移研究会推進委員会のメンバーとして「がんの浸潤・転移研究マニュアル」の編集に携わらせて頂いたことが本学会とのご縁の始まりであり、その中心メンバーであった入村達郎先生や済木育夫先生が名誉会員として殿堂入りされていることを考えると、私も随分の古株ということになります。

私が転移研究を始めたのは、30年程前には時折あった微生物学講座という名の下で免疫学の研究を行っている講座でした。従って、本学会の多くの会員の方からすると、お門違いの研究室の出身です。免疫研究をしている講座の中で唯一1人だけ癌転移研究をさせられるはめになったというところでしょうか。サイトカイン研究の華々しい時代でしたので、癌細胞が産生する液性因子と悪性度（癌転移）の関連を大学院の研究課題として与えられました。seed and soil theoryに基づくこの研究は私には魅力的で、GM-CSFを産生する癌が肺に、IL-6を産生する癌が肝臓に転移しやすく、それはそれらサイトカインで誘導されるミエロイド系細胞による抗腫瘍免疫反応の抑制に起因することを見出しました。折しも、GM-CSFでミエロイド系細胞から樹状細胞を誘導し癌免疫治療を行うという話がアメリカで出始めた時分だったため、とある学会で腫瘍免疫学の大家から散々な酷評を受けることとなり、これが私の研究者としての人格形成に大きな影響を与えたことに疑いの余地はありません。現在ではGM-CSF + IL-6でのマウス骨髄細胞の培養はmyeloid-derived suppressor cells (MDSC)の標準的な誘導法の1つとされ、MDSCは tumor-associated macrophage (TAM)としてregulatory T細胞とともに癌組織内での中心的な免疫抑制細胞とされています。しかし、私が最初にMDSCを発見したのだと大学院生に話しても、全く相手にもされません。

大学院修了後、がん転移モデルを用いてNK細胞やNKT細胞、免疫関連分子の研究を行い、本学会にも定期的に参加してきましたが、私の研究テーマが転移研究からは離れて抗腫瘍免疫研究に次第にシフトしていったため、発表をする機会は減っていきました。しかし、基礎研究者

以外にも臨床研究者や製薬企業研究者も多数参加する本学会で得られる情報は、研究を進めるに当たり非常に有意義なものでありました。その間に、基礎研究結果のみで臨床的な成果を上げられずにいた抗腫瘍免疫は、immune check point blockerという逆転満塁ホームランにより、今や癌治療研究の中心となり、免疫の門外漢でさえ腫瘍免疫を語るご時世となっています。

一方、がん転移の研究においては、分子標的薬の開発研究と共に、Epithelial-Mesenchymal Transition (EMT)にMesenchymal-Epithelial Transition (MET)、cancer stem cellやCancer-associated fibroblast (CAF)等による癌微小環境、さらにはcirculating tumor cells (CTC)にExosomeと、次々に新たな関連因子や概念が提示されるものの、残念ながらめざましい効果を示す抗転移薬は未だに開発されておられません。しかし抗腫瘍免疫の動向(枯衰栄盛?)から考えるに、“転移を制する者は癌を制す”としての弛まぬ研究の積み重ねが塁上のランナーとなり、最後の逆転満塁ホームランにつながると信じて努力を惜しんではならないのでしょうか。

未だに研究室を持つこともできない既に初老の身ではありますが、本学会とがん転移研究の発展のために、球場の整備清掃とチケットもぎくらいしかできないと思いますが、少しでもお役に立てるよう微力ながらも努めさせて頂きたいと考えております。どうぞよろしくお願ひ致します。

新評議員の申請案内

日本がん転移学会会則第15条（会則参照）および本会役員選任規定第11条に基づき、次期評議員（任期：第28回～30回）補充選出を7月18日の理事会にて行います。希望される方は下記の方法で申請してください。なお、自薦・他薦(理事)を問いません。

■申請方法■

- 1) 所定の様式により指定期日までに申請してください。
申請書は、日本がん転移学会事務局へe-mailにてご請求ください。
- 2) 申請書類は下記宛に簡易書留郵便で送付ください。
〒541-8567 大阪府中央区大手前3-1-69
大阪国際がんセンター・研究所内
日本がん転移学会事務局

★ 評議員の年会費は10,000円です ★

締切：平成30（2018）年6月1日（必着）

【注意事項】（日本がん転移学会役員選任規定より抜粋）

個人評議員の選出条件

- 1) 原則として3年以上本会会員であり、会費を完納していること。
- 2) 本会や関連学会、学術雑誌などですぐれた評価を受けていること。
* 3年連続して評議員会を欠席した者はその資格を喪失する。
* 役員任期は65歳になる年の12月末で終了する。

第23回日本がん転移学会研究奨励賞募集

<http://jamr.umin.ac.jp/research/index.html>

本賞はすぐれた研究業績を発表した本学会会員若干名に対して、
選考の上、本学会学術集会において授与する

【募集期間】

平成30年4月1日～9月30日

- ・受賞候補業績の範囲は、原則として本学会において発表された業績として、
本会会員により応募されたものとする。
- ・受賞候補業績は、将来の発展が期待される若手研究者(応募年度の4月1日現在
43歳以下)によるものとする。
- ・研究奨励賞受賞者数は単年度2名程度を原則とする。
- ・研究奨励賞の賞金(奨励研究費)は1件20万円とする。

募集要項・申請書等については、事務局までメール・Faxでお問い合わせください

◆事務局◆ E-mail: office-jamr@umin.ac.jp Tel/Fax 06-6945-0355

研究奨励賞受賞者一覧

| | 受賞者 | 所属 |
|------|-------|-----------------------------|
| 第1回 | 藤田 直也 | 東京大学分子細胞生物学研究所 |
| | 磯合 敦 | 旭硝子株式会社中央研究所 |
| 第2回 | 吉村 雅史 | 大阪大学医学部第二内科 |
| | 矢野 聖二 | 徳島大学医学部第三内科 |
| 第3回 | 伊藤 和幸 | 大阪府立成人病センター研究所 |
| 第4回 | 越川 直彦 | スクリプス研究所/横浜市立大学 |
| 第5回 | 吉治 仁志 | 奈良県立医科大学第三内科 |
| | 軒原 浩 | 国立がんセンター中央病院内科 |
| 第6回 | 山本 博幸 | 札幌医科大学医学部内科学第一講座 |
| | 伊藤 彰彦 | 大阪大学大学院医学系研究科病理病態学 |
| 第7回 | 李 千萬 | 大阪大学大学院医学系研究科臓器制御外科 |
| | 板野 直樹 | 愛知医科大学分子医科学研究所 |
| 第8回 | 三森 功士 | 九州大学生体防衛医学研究所腫瘍外科 |
| | 隈元 謙介 | 福島県立医科大学第二外科 |
| 第9回 | 滝野 隆久 | 金沢大学がん研究所細胞機能統括 |
| | 狛 雄一朗 | 神戸大学大学院医学系研究科生体情報医学講座 |
| 第10回 | 菅原 一樹 | 大阪大学大学院医学系研究科 |
| | 川田 学 | (財)微生物化学研究会微生物化学研究センター |
| 第11回 | 加藤 幸成 | 産業技術総合研究所 糖鎖医工学研究センター |
| 第12回 | 下田 将之 | 慶應義塾大学医学部病理学教室 |
| | 小泉 桂一 | 富山大学和漢医薬学総合研究所病態生化学 |
| 第13回 | 渡邊 リラ | 第一三共株式会社 |
| 第14回 | 王 偉 | 金沢大学がん研究所腫瘍内科 |
| | 山本 真義 | 浜松医科大学第2外科 |
| 第15回 | 清水 史郎 | 慶應義塾大学 理工学部 |
| 第16回 | 早川 芳弘 | 東京大学大学院薬学系研究科 生体異物学教室 |
| | 福島 剛 | 宮崎大学医学部 病理学講座腫瘍・再生病態学分野 |
| 第17回 | 山口 英樹 | 国立がんセンター研究所 転移浸潤シグナル研究分野 |
| | 由井 理洋 | Department of Surgery, UCSF |
| 第18回 | 園下 将大 | 京都大学大学院医学研究科 遺伝薬理学 |
| | 谷口 博昭 | 東京大学医科学研究所 抗体ワクチン治療研究部門 |
| 第19回 | 泉 浩二 | 金沢大学 泌尿器科 |
| | 坂本 毅治 | 東京大学医科学研究所 人癌病因遺伝子分野 |
| 第20回 | 星野 大輔 | 神奈川県立がんセンター臨床研究所 がん生物学部 |
| 第21回 | 後東 久嗣 | 徳島大学大学院医歯薬学研究部 呼吸器・膠原病内科学分野 |
| 第22回 | 神田 裕介 | 鳥取大学医学部 生体情報機能学講座 病態生化学分野 |
| | 神田 光郎 | 名古屋大学大学院医学系研究科 消化器外科学 |

日本がん転移学会会則

第1章 会の名称

第1条 本会を「日本がん転移学会」“The Japanese Association for Metastasis Research”と称する。

第2章 目的および事業

第2条 本会は、がん転移による死亡率を減少せしめるべく、基礎、臨床、開発（薬剤、機器等）研究を通じて実質的討議を行い、がん転移研究の発展、診断・治療の進歩普及に貢献する事を目的とする。

第3条 本会は、前条の目的達成のため、次の事業を行う。

- (1) 学術集会を少なくとも年に1回開催
- (2) がん転移に関する研究発表、情報交換、資料の収集、教育及び研修
- (3) 本分野に関して海外研究者との連携
- (4) その他本会の目的達成に必要な事業

第4条 本会の事務局は、大阪市中央区大手前3丁目1番69号、大阪国際がんセンター・研究所内に置く。

第3章 会員

第5条 会員は、本会の趣旨に賛同し、評議員、顧問あるいは名誉会員の推薦を受け、理事会の承認を得て入会した個人ならびに法人（法人格のない団体を含む）とする。

第6条 会員である法人の取扱いは次による。

1. 法人に所属する個人はその法人の承認を得れば本会の事業に参加できる。
2. 前項により参加する個人からは年会費を徴収しない。
3. 会員である法人は登録者3名迄と会計事務担当者1名（兼任も可）を決め事務局に届出なければならない。

第7条 会員は評議員会において別に定める会費を納入しなければならない。

第8条 引きつづき2年以上会費を滞納したものは評議員会の議により、その資格を喪失する。

第9条 顧問は理事会にて推薦、評議員会にて承認を受ける。また、本会に対して特に功労のあった者は、名誉会員・功労会員として理事会にて推薦、評議員会にて承認を受ける。顧問・名誉会員・功労会員は本会の発展のために適切な助言をする。顧問・名誉会員・功労会員は会費を要しない。

第4章 役員および役員会

第10条 本会に会長1名、副会長1名、若干名の理事ならびに評議員、監事2名、事務局幹事1名を置く。

* 事務局幹事は会長が任命し、会長及び理事会の事務を補佐する。

第11条 会長は本会を統括し、理事会・評議員会では議長となる。副会長は、次期会長がこれを務め、会長を補佐し会長に事故のある場合はその職務を代行する。会長・副会長の任期は1年とする。

第12条 理事は評議員会にて、評議員の中から選任される。任期は3年とし、任期終了後1年間は再選されない。理事は会長を補佐し日常の会務について決定し、執行する。理事会の構成は、会長・副会長・理事および前会長とする。理事会は構成員の2/3以上の出席（但し委任状を提出した人は出席とみなす）により成立し、議決は出席者の過半数をもって決する。

第13条 評議員は会員の中から選出される。評議員の任期は3年とし、再任は妨げない。評議員会は会の運営に関する重要事項を審議決定する。評議員会は評議員の1/2以上の出席（但し委任状を提出した人は出席とみなす）をもって成立し、議決は出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

第14条 監事は評議員の中から選出される。監事の任期は1年とし、再任は妨げない。監事は本会の会計および会務を監査し、理事会・評議員会にて報告する。

第15条 次期会長・理事・評議員・監事の選出は日本がん転移学会役員選任規程に基づく。

第5章 総会および学術集会

第16条 総会は毎年1回学術集会の時期に会長が招集し、総会の議長となって次の議事を行う。

1. 会務の報告
2. 会長が必要と認める事項

総会の議事は出席者の過半数によって決する。可否同数のときは議長の決するところによる。

第17条 会長が必要と認めたときは評議員会の議を経て、臨時総会を随時開催することができる。臨時総会の議案は定期総会に準ずるものとする。

第18条 学術集会は毎年1回会長が主宰し、研究発表、意見交換を行う。

第19条 本会会則第2章第3条の4の規定に基づき各種の委員会を設けることができる。委員会の設置、その構成及び運営方法は、理事会において討議し、評議委員会にて承認する。また会の目的を達成するための具体的、実質的討議を行うため、研究推進会議(班)を設置することができる。その構成及び運営方法は理事会において討議し、評議委員会にて承認する。研究推進活動の経過については、学術集会で報告する。

第6章 会計

第20条 本会の経費は会員が拠出する会費ならびに協賛金等をもってこれにあてる。

第21条 毎年度収支決算は会長が作成し、監事の監査を受け、評議委員会の承認を得て、毎年総会において報告する。

第22条 会計年度は毎年1月1日に始まり12月31日に終わる。

第7章 会則の変更

第23条 本会会則の変更は理事会、評議委員会および総会において、各々出席構成員の2/3以上の承認を得なければならない。

付則

本会則は平成12年7月1日よりこれを実施する。本会則は平成14年6月8日一部改正した。本会則は平成18年9月3日一部改正した。本会則は平成29年3月25日大阪府立成人病センターの移転及び名称変更に伴い第2章4条を変更する。

日本がん転移学会役員選任規程

第1章 役員を選任

第1条 会則第15条により次期会長(副会長)・理事・評議員および監事は本規定に基づき選出される。なお、役員は65歳をもって定年とする。

第2章 次期会長(副会長)の選出方法

第2条 次期会長の選出に際しては、評議員全員に告示する。候補者は所定の様式で抱負を述べた資料を理事会に提出し、理事会はこれを討議し候補者1名を推薦する。

第3条 次期会長の選出は評議委員会で行う。

第3章 理事の定数と選出方法

第4条 理事の定数は個人評議員より約6名(原則として基礎3名、臨床3名)、法人評議員より約2名とする。

第5条 理事は会則第12条により評議員の中から選出される。

第6条 個人会員理事は評議員の選挙により選出される。候補者は所定の様式で抱負を述べた資料を評議委員会に提出する。

第7条 法人会員理事は理事の選挙により選出される。

第4章 評議員の選出方法

第8条 評議員は会則第13条により会員の中から選出される。

第9条 評議員の選出は理事会で行う。

第10条 個人評議員は、一定の条件(細則に定める)を満たす者とする。

第11条 個人評議員の候補者は所定の様式による資料を本会事務局に届け出ること。

第12条 法人会員評議員は理事会で選出する。

第5章 監事の選出方法

第13条 監事は会則第14条により評議員の中から選出される。

第14条 監事の選出は理事会で行う。

付則 1. 理事選挙の施行は次期評議員が選出された(平成15年度)以降とする。

2. 本役員選任規程は平成14年6月8日よりこれを実施する。本役員選任規程は平成15年6月29日一部改正。

3. 本規程の変更は理事会および評議委員会において、各々出席構成員の2/3以上の承認を得なければならない。

4. 役員任期は、65歳になる年の12月末で終了する。

日本がん転移学会役員選任規程細則

1. 個人会員理事の選出方法

1) 投票は原則として郵送とする。

2) 評議員は基礎系候補・臨床系候補に各1票投票する。

2. 個人評議員の選出条件

1) 原則として3年以上本会会員であり、会費を完納していること。

2) 本会や関連学会、学術雑誌などですぐれた評価を受けていること。

3. 評議員の資格

1) 3年連続して評議委員会を欠席した者はその資格を喪失する。

日本がん転移学会 顧問・名誉会員

| | | | |
|--------------------------|----------------------|----------------------|----------------------|
| 顧問： ^(故) 菅野 晴夫 | 杉村 隆 | ^(故) 明渡 均 | |
| 名誉会員：愛甲 孝 | 入村 達郎 | 小林 博 | ^(故) 佐藤 春郎 |
| ^(故) 末舛 恵一 | 高後 裕 | 清木 元治 | 済木 育夫 |
| 曾根 三郎 | 谷口 俊一郎 | ^(故) 田中 健蔵 | 田原 榮一 |
| ^(故) 塚越 茂 | ^(故) 鶴尾 隆 | 新津 洋司郎 | ^(故) 螺良 英郎 |
| ^(故) 中村 久也 | ^(故) 磨伊 正義 | 宮坂 昌之 | 門田 守人 |
| 渡辺 寛 | Isaiah J. Fidler | | |
| 功労会員：東 市郎 | ^(故) 阿部 薫 | ^(故) 尾形 悦郎 | 岡田 保典 |
| 小野 真弓 | 垣添 忠生 | 神奈木 怜児 | 北島 政樹 |
| ^(故) 久保田 哲朗 | 久保田 俊一郎 | 桑野 信彦 | 佐治 重豊 |
| 清水 暁 | 高橋 俊雄 | 竹之下 誠一 | 竜田 正晴 |
| 田中 紀子 | 寺田 雅昭 | 豊島 久真男 | 中津川 重一 |
| 西村 行生 | ^(故) 馬場 正三 | 宝来 威 | 細川 真澄男 |
| 宮城 妙子 | 宮崎 香 | 武藤 徹一郎 | |

日本がん転移学会役員

| | | | |
|----------------|---------|------------|---------|
| 会長：越川 直彦 (27回) | | | |
| 副会長：夏越 祥次 | | | |
| 前会長：土岐 祐一郎 | | | |
| 理事：海野 倫明 | 越川 直彦 | 国安 弘基 | 竹田 和由 |
| 夏越 祥次 | 西岡 安彦 | 大鵬薬品工業(株) | 中外製薬(株) |
| 監事：川田 学 | 日本化薬(株) | | |
| 評議員：足立 靖 | 石井 秀始 | 板野 直樹 | 伊藤 和幸 |
| 伊東 文生 | 稲田 全規 | 井上 正宏 | 猪原 秀典 |
| 植田 政嗣 | 上原 久典 | 大上 直秀 | 大島 正伸 |
| 太田 哲生 | 岡田 太 | 沖 英次 | 奥野 清隆 |
| 尾崎 充彦 | 片岡 寛章 | 加藤 淳二 | 加藤 靖正 |
| 加藤 幸成 | 神田 光郎 | 北川 透 | 北川 雄光 |
| 北台 靖彦 | 隈元 謙介 | 小泉 桂一 | 小林 浩 |
| 堺 隆一 | 坂本 修一 | 坂本 毅治 | 佐々木 隆光 |
| 澤田 鉄二 | 清水 英治 | 清水 史郎 | 滝野 隆久 |
| 田中 稔之 | 谷口 博昭 | 茶山 一彰 | 中 紀文 |
| 永野 浩昭 | 中森 正二 | 中山 淳 | 馬場 秀夫 |
| 浜田 淳一 | 早川 芳弘 | 東 伸昭 | 樋田 京子 |
| 福島 剛 | 藤田 直也 | 藤原 俊義 | 藤原 義之 |
| 二口 充 | 松尾 洋一 | 溝上 敦 | 三森 功士 |
| 向田 直史 | 望月 早月 | 森 正樹 | 八代 正和 |
| 安井 弥 | 安田 卓司 | 安本 和生 | 柳川 天志 |
| 矢野 聖二 | 矢野 雅彦 | 山本 浩文 | 山本 博幸 |
| 矢守 隆夫 | 由井 理洋 | 横崎 宏 | 横山 省三 |
| 吉治 仁志 | 渡邊 昌彦 | | |
| 旭硝子(株) | エーザイ(株) | 協和発酵キリン(株) | 第一三共(株) |

(アイウエオ順)

事務局幹事：井上 正宏

(法人評議員については登録会員の中から各社より各1名選任される)
 評議員任期：平成29年7月29日～平成30年/第27回総会まで
 (第25-27回)

日本がん転移学会事務局 宛
Fax : 06-6945-0355

日本がん転移学会連絡用紙

日本がん転移学会会員の種々の変更・退会等の連絡はこの用紙をご利用ください。
会員番号(郵便物の宛名ラベルに印刷してある貴氏名の右下の数字)、並びにご氏名(フリガナ)を明記の上、
変更したい事項をご記入いただき、封書またはFax、E-mailにてご連絡ください。

年 月 日

住所等変更 ・ 退会 届

(上記、どちらかを○で囲んでください)

| | | | | | |
|--------|-------------------------------|------|-----|---|------------|
| (フリガナ) | | 会員番号 | | | |
| 氏名 | | 生年月日 | | | |
| 勤務先 | 勤務先名称(部所属も記入してください) | | | | |
| | 〒 | | | | |
| | Tel | | Fax | | |
| | E-mail | | | | |
| 自宅 | 〒 | | | | |
| | Tel | | Fax | | |
| | E-mail | | | | |
| | 雑誌等送付先を○で囲んでください。 勤務先 ・ 自宅 | | | | |
| 変更年月日 | 20 | 年 | 月 | 日 | 付で変更します |
| 退会届 | 20 | 年 | 月 | 日 | 付でもって退会します |
| その他 | | | | | |

※個人情報について

会員への連絡、会誌等の発送等、学会活動の目的に限定して利用します。

=====
[発行・編集]
日本がん転移学会事務局
Tel/Fax 06-6945-0355 (直通)
E-mail: office-jamr@umin.ac.jp
〒541-8567
大阪府中央区大手前3丁目1番69号
大阪国際がんセンター・研究所内
=====

2018.4